

プロカルシトニンの有用性の検討

○篠崎 寿好 坂元 美智 森 智子 野口 裕史 花牟禮 富美雄 松尾 剛志

社会保険 宮崎江南病院

【はじめに】

プロカルシトニン(以下 PCT)はカルシトニンの前駆物質であるが、全身性細菌感染症においては甲状腺外の細胞で産生され血中に放出されるため、細菌性敗血症の鑑別診断とその重症度の判定にも有用である。当院では 2011 年 12 月より PCT 検査を院内導入した。今回、当院において、血液培養実施症例の培養結果及び血液培養と同時に検査が実施された CRP、白血球数、そして PCT との関連を検討したので報告する。

【対象と方法】

2011 年 12 月～2013 年 5 月に血液培養が提出された 374 件のうち PCT、CRP、白血球数が同時に測定された 83 件を対象としてデータの解析を行った。血液培養ボトルは VersaTREK、PCT の測定試薬はスフィアライト・ブラームス PCT、測定にはスフィアライト・ワコーを使用した。

【結果】

血液培養から細菌が検出された陽性群と陰性群で有意差検定を行った結果、PCT $p=0.032$ 、CRP $p=0.329$ 、WBC $p=0.245$ と

PCT のみに有意差が認められた。細菌性敗血症群と血液培養では起炎菌は検出されなかったが他の部位から起炎菌が検出された群を合わせた症例と、非細菌感染と思われる群で有意差検定を行った結果、PCT $p=0.006$ 、CRP $p=0.385$ 、WBC $p=0.130$ と PCT のみに有意差が認められた。

【まとめ】

今回の検討から従来の感染マーカーである CRP、あるいは白血球と比較して、PCT は細菌感染症の鑑別に有用であると思われた。

連絡先 0985-51-7575